

松山大学論集
第二十六卷第四号抜刷
平成二十六年十月発行

『外交時報』総目次―戦後編(三)

——一九六八年一月第一〇四八号—一九七六年二月第一一四〇号——

伊藤 濱
藤岡 鷹
信哉 行

資料

『外交時報』総目次―戦後編(三)

―一九六八年一月第一〇四八号―一九七六年二月第一一四〇号―

伊藤信哉
浜岡鷹行

第一〇四八号 一九六八年一月号

巻頭言 決済の年・一九六八年を迎えて〔三好貞雄〕

三一三

対話 アジアの建設とアジア外交の進路〔李東元・李文洙・廣田洋二・関戸辰蔵〕

四一―一七

富国強兵と富民弱兵〔武藤貞一〕

一八一―二〇

資料 新防衛理念と新経済理念―平和を管理する力 機能的企業復合〔亀井貫一郎〕

二一―三七

外交時報創刊七〇周年特集

外交時報七〇周年の回顧―祖国と運命を俱にした日本最古の月刊雑誌〔田村幸策〕

三八―四二

有賀博士の十三回忌に際して

一 外交時報昭和八年六月二五日発行 有賀博士追憶拡大号所載の再録〔立作太郎〕

朝野名流の祝賀〔三木外務大臣以下一〇八氏〕

軌道に乗った東南ア電気通信網整備計画〔馬場嘉光〕

明治末期、小村外務大臣の孫文等に対する施策について

一 中国革命同盟会機関紙『民報』等の発行停止前後をめぐって〔河村一夫〕

資料 ベトナム問題を大いに語る―ジョンソン米大統領記者会見（一九六七年十一月二七日）

ナシヨナリズムの世紀〔中〕〔ハンス・コーン（佐々木俊郎・浦野起央共訳）〕

第一〇四九号 一九六八年二月号

巻頭言 核防条約と核兵器廃棄〔三好貞雄〕

ソ連・東欧をめぐって〔尾上正男〕

大詰めにきた核防条約―土俵際の粘りを今こそ示すべきである〔倉前義男〕

インドネシア特集

転落せる独裁者スカルノ―第二部 九・三〇事件をめぐる権力斗争〔森田大耕〕

インドネシア国軍の特性〔解説〕〔奥源造〕

国防治安綱領と国軍斗争綱領〔本社編集部 提供〕

ロシア革命成立史〔三〕ウクライナの自治要求が第三革命を誘発〔延島英一〕

孫中山伝記〔一五〕〔木下彪〕

ナシヨナリズムの世紀〔下〕〔ハンス・コーン（佐々木俊郎・浦野起央共訳）〕

四三―四七

四八―五六

五七―六二

六三―七一

七二―七八

七九―九九

二―五

六一―一

一一―一六

一七―四〇

四一―四六

四六―六四

六五―七二

七三―八〇

八一―九三

第一〇五〇号 一九六八年三月号

巻頭言 倉石発言とベトナム問題〔三好貞雄〕

二―二

ベトナム戦争特集号

ベトナム戦争の性格と解決―鍵を握るは中共かソ連のどちらか〔田村幸策〕

三―一〇

鼎談 ベトナム戦争を語る〔三宅和助・奥源造・浦野起史〕

一一―二四

アンケート ベトナム戦争をいかに解決するか（中国東南亜の諸情勢も併せて）

〔賀屋興宣・千葉三郎・赤城宗徳・小峯柳多・帆足計・岩動道行・大平善梧・安岡正篤・尾上正男・三好修・会田雄次・谷口雅春・御手洗辰雄・佐伯喜一・斎藤栄三郎・古垣鉄郎・小谷鶴次・瀬川善信・向後英一・植田捷雄・中島嶺雄・大田政作・大畑篤四郎・土居明夫・梅原一雄・花見達二・黒羽茂・亀井貫一郎・上野秀夫・宇野重昭・前芝確三・倉前義男・金戸嘉七・河原宏・中村平治・坂田善三郎・村瀬興雄・桜井光堂・川端末人・伊手健一・元川房三・草間秀三郎・小川芳彦・今井勝郎・金田近二・石村暢五郎・三瀧信吾・今村之治・上田修一郎・海妻玄彦・小寺初世子・塩沢清宣・大井篤・武藤貞一・完倉寿郎・牧内正男・日比野正明・孤田康一・延島英一・角田時雄・手塚信吉・塚本毅・岡本順一・落合忠士・青木出郎・荒木武行・矢次保・甲斐静馬・沖野亦男・河原田健雄・広西元信・関戸辰蔵・稲葉準造・衛藤藩吉・逸名氏（二名）・奥野栄・西田勲・山本勝市・岸田修・保科善四郎〕

二五―三八

ベトナムとアメリカと日本〔田尻愛義〕

米中のあいだ〔蔵居良造〕

ベトナム戦争の現況と将来〔完倉寿郎〕

ベトナム戦争の逆説―タカ派ハト派の相関関係〔青野博昭〕

ベトナム戦争の思想的本質〔政治・経済・外交以前の問題〕

―感性的な南越仏教の悲劇〔大嶋忠雄〕

ベトナム紛争の史的考察〔高島昭夫〕

書評 浦野起央編著『ベトナム問題の解剖―分析と資料』

〔田村幸策・奥源造・加藤公彦・牧内正男〕

第一〇五一号 一九六八年四月号

巻頭言 仮装敵国論議に想う〔三好貞雄〕

北京外交と東南アジア―造反外交の理論と現実〔今川瑛一〕

ミクロネシアと日本〔上〕〔青木出郎〕

沖繩における渡航制限の実態について〔松原正晃〕

インドネシア・クーデターの研究〔上〕

―第三部・新政権誕生から独立記念日をめぐって〔森田大耕〕

ロシア革命成立史〔四〕民族関係の舞台暗転で指導者交替〔延島英一〕

孫中山伝記〔一六〕〔鄧慕韓著・木下彪訳注〕

三九―五一

五二―五八

五九―六八

六九―七五

七六―八六

八七―九三

九四―九八

二―二

三―九

一〇―二一

二二―三二

三三―四五

四六―五一

五二―五九

資料 アラブ社会主義セミナーの最終コミュニケ（一九六七年五月二八日）	六〇―六一
資料 アフリカ・マダガスカル共同機構憲章	六二―六四
国際連合の機構（上）〔岡本順一〕	六五―八七

第一〇五二号 一九六八年五月号

巻頭言 ベトナム和平と核防条約〔三好貞雄〕	二―三
ベトナム和平の探究と和平条件―紆余曲折の難行路〔田村幸策〕	四―一―
アジア経済開発協力の前進―第三回東南ア開発閣僚会議〔牧内正男〕	一一―一六
将来の通貨 世界の悩み―病めるドルと金〔斎藤栄三郎〕	一七―一九
資料 北爆停止と大統領不出馬	
―ジョンソン大統領の全米国民向け演説（全文・一九六八年三月三二日）	二〇―二四
ミクロネシアと日本（下）〔青木出郎〕	二五―三七
孫中山伝記（一七）〔鄧慕韓著・木下彪訳注〕	三八―四五
スウェーデン国防の諸問題〔クルト・サミュエルソン〕	四六―五六
インドネシア・クーデターの研究（下）	
―第三部・新政権誕生から独立記念日をめぐって〔森田大耕〕	五七―七三
明治一五年、壬午京城の変後の井上外務卿の対清政略〔河村一夫〕	七四―八三

第一〇五三号 一九六八年六月号

巻頭言「背のび」外交の教訓〔三好貞雄〕

対中政策の基本認識ーベトナム和平会議を通して観る〔蔵居良造〕

アジア・太平洋構想の思想と現実〔青野博昭〕

独立五十周年を迎えたフィンランド

ー社会党の左旋回、共産党の右旋回で政局安定〔チャールス・アンドラス〕

ロシア革命成立史〈五〉党内分裂が敵を欺むく効果を発揮〔延島英一〕

胡璇沢駐シンガポール副領事について〔野崎光明〕

資料 クリフォード米国防長官のベトナム演説

〈一九六八年四月二二日 ニューヨーク・AP通信加盟年次総会で〉

資料 国境に於ける天然の宝庫『寧夏』〔朱桂 〔扇谷要訳〕〕

資料 国際通貨体制の強化に関するジョンソン大統領の教書

〈一九六八年四月三〇日、議会提出〉

資料 昨年度のスウェーデンの輸出高五%伸びる

資料 スウェーデン、経済政策委員会を設立

資料 ポール次期米国連代表テレビ記者会見〈抜萃・一九六八年五月五日放送〉

資料 ドイツにおける極左分子の動向〔D・K〕

資料 今日のドイツ国防政策（シュレーダー国防相）〔D・K〕

資料 ドイツ国民は何を望んでいるか？〔D・K〕

二一三

四一一

二二二

二二一三〇

三一三六

三七三九

四〇一四二

四二一四五

四六一四八

四八一四八

四八一四八

四九一五三

五三一五四

五四一五四

五五一五五

国際連合の機構〈下〉〔岡本順一〕

五六―七八

第一〇五四号 一九六八年七月号

巻頭言 核拡散条約の成立と非核連盟の提唱〔三好貞雄〕

二―五

フランス激変の原因を探る―特に学生の疎外感の意義について〔林三郎〕

六一―一二

中共とベトナム〔植田捷雄〕

一三―一五

米国における繊維品輸入制限の動き〔有田円二〕

一六―二〇

ベトナム和平への足跡―米国と北ベトナム〔浦野起央〕

二二―三七

資料 北ベトナム代表とのパリ本会談におけるハリマン米代表の発言内容〔全文〕

三八―五五

資料 アメリカ代表とのパリ本会談におけるベトナム民主共和国代表ジュアン・トイの発言

五六―六四

〔全文〕

資料 中共に関するカツツエンバック米国務次官演説〔全文〕

六五―六八

（一九六八年五月二一日ワシントン、全米記者クラブ）

資料 世界貿易拡大に関するジョンソン米大統領教書〔全文〕

六八―七一

（一九六八年五月二八日議会提出）

資料 グラスボロ州立大学におけるジョンソン米大統領の演説〔全文〕

七一―七四

（一九六八年六月四日）

インドネシア・クーデターの研究―第四部 軍事裁判〔森田大耕〕

七五―九五

第一〇五五号 一九六八年八月号

巻頭言 猛省せよ、社会党「非武装中立」論の愚を捨てよ〔三好貞雄〕

日米安保体制と沖繩の評価〔山田久就〕

核防条約に関する三木外相への手紙

― 調印は七〇年まで、批准は七三年まで見合わせよ〔倉前義男〕

アメリカの対東欧政策〔横尾和歌子〕

ポーランドの対独政策の推移と変遷

― 西独接近策より東独と一体化に転換〔A・ロス・ジョンソン（延島英一訳）〕

資料 パリ和平会談における米・北ベトナム両代表の公式発言内容（全文）（二）

書評 リチャード・ヒスコックス『ポーランド―東西両陣営の掛け橋？』

戦後のポーランドにおける発達に関する「解釈」によせて〔横尾和歌子〕

資料 客家源流及其変遷〔黎耀新（扇谷要訳）〕

インドネシア・クーデターの研究（完）― 第五部 スカルノ追放の最終劇〔森田大耕〕

第一〇五六号 一九六八年九月号

巻頭言 国家の生きる途〔三好貞雄〕

アメリカ外交の理想像―フルブライトの大計画〔田村幸策〕

座談会 核・北方領土・朝鮮・中国の諸問題（外交懇話会第一回座談会）

〔野田武夫・長谷川峻・床次徳二・谷川和穂・小峰柳多・田川誠一・平泉渉・広田洋二〕

二一三

四一八

九一三

一四一九

二〇三八

三九一六八

六九一七一

七二一七四

七五一九六

二一二

三一一六

- 角田順・蔵居良造・牧内正男・小谷秀二郎・浦野起央・平石義親・武内文彬・三好貞雄 一七―三〇
- アジア・太平洋閣僚会議はどこへ―その性格と日本の役割〔牧内正男〕 三二―三七
- アッサムの風雲―ポスト・ベトナムの難問題の一つ〔桐生稔〕 三八―四三
- 書評 蔵居良造著『現代中国論』―社会主義革命批判〔小林多加士〕 四四―四四
- 資料 バリ和平会談における米・北ベトナム両代表の公式発言内容〔全文〕(三) 四五―五九
- 中東戦争の起因と経過の分析〔浦野起央〕 六〇―八五
- 資料 毎年八億ドルのポロイ商売―麻薬は中共第一の外貨稼ぎ〔中華週報七月二二日〕 八六―八八
- 資料 牧地の春〔梅済民〔扇谷要訳〕〕 八八―九二

第一〇五七号 一九六八年一〇月号

- 巻頭言 世界政策を失ったソ連邦〔三好貞雄〕 二―二
- ソ連、チェコ侵入の本質―ソ連の帝国主義的東欧搾取〔林三郎〕 三―九
- 防衛に対する謬論十箇条〔海原治〕 一〇―一八
- 座談会 いまだ還らざる北方領土の諸問題〔外交懇話会第二回座談会〕
- 〔野田武夫・床次徳二・田村幸策・御手洗辰雄・広田洋二・田尻愛義・斎藤忠・
牧内正男・倉前義男・平石義親・江田静蔵・三好貞雄〕 一九―三六
- アメリカの対インドネシア政策〔ミン・タン〔横尾和歌子訳〕〕 三七―五四
- 資料 チェコスロバキア「二千語宣言」〔定訳〕 五五―五九
- 資料 バリ和平会談における米・北ベトナム両代表の公式発言内容〔全文〕(四) 六〇―九〇

第一〇五八号 一九六八年一一・一二月号

巻頭言 核防条約の調印は慎重にせよ〔三好貞雄〕

レーニン主義の崩壊過程―チェコの民主化とマルクスの原理論〔廣西元信〕

マルクス主義者の倫理観〔田村幸策〕

座談会 核防条約をいかに扱うか〔外交懇話会第三回座談会〕

〔野田武夫・長谷川峻・田村幸策・大平善梧・広田洋二・小谷秀二郎・斎藤忠・

角田順・倉前義男・野沢豊吉・三好貞雄〕

第一次大戦後のオットマン帝国〔オルハン・テュレリ〕

新米大統領の横顔〔花井等〕

資料 パリ和平会談における米・北ベトナム両代表の公式発言内容〔全文〕〔五〕

資料 国連総会におけるラスク米国務長官の演説（一九六八年一〇月二日）

日本とモンゴルの百年（年表・資料）（二）〔春日行雄〕

第一〇五九号 一九六九年一月号

巻頭言 ベトナム和平会議の成行〔三好貞雄〕

ドゴール大統領の世界政策変化が期待できるか〔田村幸策〕

日米安保条約自動延長論〔船田中〕

座談会 北方領土問題と沖縄復帰〔長谷川峻・高橋武彦・宮崎吉政〕

資料 パリ和平会談における米・北ベトナム両代表の公式発言内容〔全文〕〔六〕

二一二

三一八

一九一二二

二三一五一

五二一六一

六二一六三

六四一七九

八〇一八四

八五一九六

二一二

三一二二

一三一二〇

二一一二六

二七一四六

資料 北ベトナム爆撃の全面停止を発表したジョンソン米大統領の声明

(一九六八年一〇月三一日)

四七―四九

資料 毛家の「文革小組」の変遷(滄桑の変)(陳力生(扇谷要訳))

五四―六八

青海省の研究(矢野光二)

六九―八一

日本とモンゴルの百年(年表・資料)(二)(春日行雄)

八二―九二

第一〇六〇号 一九六九年二月号

巻頭言 非武装中立論の妄迷(三好貞雄)

二―二

沖縄問題の正しい解決のために―日本の求める安全保障と沖縄返還(廣田洋二)

三一―一七

西イリアン問題の経緯(青木出郎)

一八―二九

西イリアン民族自決の年を迎えて(M・W・カイシエポ)

三〇―三四

イスラエルの開発途上国援助の実態―農業技術協力を中心に(宮崎藤治)

三五―四三

ニクソン新大統領と日米関係―極東平和の柱石たるパートナー(田村幸策)

四四―五〇

資料 ニクソン米大統領の就任演説(一九六九年一月二〇日)

五一―五三

資料 ジョンソン前大統領の一般教書(一九六九年一月一四日議会合同会議に提出)

五四―五八

資料 ジョンソン大統領の予算教書抜粋(一九六九年一月一五日議会提出)

五八―六三

資料 ジョンソン大統領の経済報告抜粋(一九六九年一月一六日議会へ提出)

六三―六八

資料 フランスの上院改革及び地方制度改革について

六九―七二

―フランスにおける「参加」問題と関連して

六九―七二

資料 フランス高等教育改革について―高等教育基本法案全文仮訳

七三―八二

資料 中国革命委員会―『大陸現況』第六卷二二号〔横尾和歌子要訳〕

八三―八五

第一〇六一号 一九六九年三月号

卷頭言 沖繩問題の結論〔三好貞雄〕

二―三

安保・沖繩縦横談―第二次大戦の失敗を二度と繰返すな〔賀屋興宣〕

四―一六

東大の確認書の盲点―産学協同の拒否声明〔田村幸策〕

一七―二二

西イリアン住民投票への心構え〔M・W・カイシエポ〕

二三―二八

ソ連・中国の社会主義理論の原理的相異について

二九―三七

―現代社会主義理論の基本問題〔小林多加士〕

三八―四二

中国の権力統一の過程とその基本条件の変化―対中国政策の底辺〔土井章〕

四三―五六

資料 タイ王国憲法―解説と全訳〔西修〕

五七―六二

資料 パリ和平会談における米・北ベトナム両代表の公式発言内容〔全文〕(七)

六三―六四

書評 内田康哉伝記編纂委員会・鹿島平和研究所共編『内田康哉』〔栗原健〕

六五―九一

第一〇六二号 一九六九年四月号

卷頭言 日本歴史の転回点・沖繩問題〔三好貞雄〕

二―二

わが北方領土と南方領土の国際政治的考察

―北方領土が核基地たる間は南方領土も然らざるを得ない〔神川彦松〕
チエコ動乱と日本の今後〔秋田大助〕

若人よ、未来の天地へ〔M・W・カイシエポ（R・タナカ訳）〕

通貨不安の実態〔斎藤栄三郎〕

沖繩の昔物語―モリソン教授の「ペルリ伝」から〔田村幸策〕

資料 沖繩基地問題研究会・報告（全文）（一九六九年三月八日）

資料 昨年五月に発生したフランス学生騒動の本質とその流れについて

（アンリ・ルフューブル教授とレクスプレス誌記者との会見要旨）

付、学生騒動に対する高等専門学校学生の態度）

資料 フランスにおける労働者の企業利益参加

資料 バリ和平会談における米・北ベ・南ベ・解放戦線の公式発言内容（八）

韓国二題〔中谷忠治〕

在英国山座円次郎参事官と孫文との交渉〔河村一夫〕

外交史秘話（一）東郷少佐と安東おきよ〔大和雄助〕

書評 斎藤栄三郎博士著『キリスト教の社会思想』を讀みて〔内藤智秀〕

第一〇六三号 一九六九年五月号

巻頭言 日中覚書貿易コミュニケと古井喜実氏の責任について〔三好貞雄〕

アジアの紛争とこれに対処する道〔武者小路公秀〕

三一―二

一三一―一七

一八一―二三

二四―二五

二六一―三〇

三一―三六

三七―四二

四三―四五

四六一―五九

六〇―六四

六五―七五

七六一―七八

七九―八〇

二―三

四―一〇

ユーゴ・スラビアから日本と世界を見る〔松下正寿〕

日本をめぐる中立問題―日本の安全保障との関連において〔田村幸策〕

東南アジア経済協力への前進―大きい日本の役割〔牧内正男〕

沖繩返還をめぐる情勢―混乱の中に活路を求めて〔末次一郎〕

九全大会と中共の前途〔蔵居良造〕

毛主席の後継者・林彪―『大陸現況』第七卷五号〔横尾和歌子訳〕

中共の造反性格と攪乱外交〔苗劍秋〕

資料 パリ和平会談における米国・北ベトナム・南ベトナム・解放戦線の公式発言内容〔九〕

資料 米上院軍事委員会におけるレアード国防長官の証言〔拔萃〕

資料 NATO結成二十周年記念理事会におけるニクソン米大統領の演説

（一九六九年四月一〇日、ワシントン）

資料 ブレジネフ・ドクトリン

―国家主権についてのソ連の新しい概念〔パヴェル・K・ウルバン〕

外交史秘話（二）北清事変と北京籠城〔大和雄助〕

第一〇六四号 一九六九年六月号

巻頭言 演繹的外交と帰納的外交〔三好貞雄〕

ド・ゴール將軍の退陣をめぐる〔林三郎〕

毛林体制今後に対する疑問点〔藤井彰治〕

一〇一―一五

一六―三〇

三一―三四

三五―四一

四二―四四

四五―四九

五〇―五二

五三―六四

六五―六七

六八―七一

七二―七四

七五―七八

二―二

三―一

一一―一五

- 西パプア独立運動の展望 (一) 西イリアン協定の実施をめぐつて〔森田大耕〕
 世界各国の安全保障条約 (二) 四〇数カ国の比較研究〔佐藤重徳〕
 韓国の憲法改正問題〔西修〕
 日米ソ経済圏の構想―日本の世界戦略論に関する私の第四論文〔田村喜照〕
 資料 ベトナム戦争に関するニクソン米大統領の演説〔全容〕(一九六九年五月二四日)
 資料 バリ和平会談における米代表の公式発言内容 (一〇〇)
 資料 アスパック・文化社会センター(ソウル) 報告
 ―アジア・太平洋時代の提唱〔姜秉奎(横尾和歌子訳)〕
 資料 中国共産党規約(中国共産党第九回全国代表大会一九六九年四月二四日採択)
 外交史秘話(三) 日独通商条約と条約違反〔大和雄助〕
- 一六一―二八
 二九―五〇
 五一―五四
 五五―六一
 六二―六六
 六七―七三
 七四―七五
 七六―七八
 七九―八一

第一〇六五号 一九六九年七月号

- 巻頭言 中ソ論争と日本の立場〔三好貞雄〕
 日本マスコミの特異性―広く外国の人々の認識を求める〔武藤貞一〕
 アジア地域協力への前進―定着した非軍事的性格〔牧内正男〕
 西パプア独立運動の展望 (二) 西イリアン協定の実施をめぐつて〔森田大耕〕
 キブツ思想と日本青年〔手塚信吉〕
 毛沢東夫人・江青―『大陸現況』第七卷二号〔横尾和歌子訳〕
 外交史秘話(四) 尼港事件〔大和雄助〕
- 二―四
 五―八
 九―一三
 一四―二一
 二二―二五
 二六―二九
 三〇―三二

外交史秘話余話 安東おきよ後日談〔山本茂〕

資料 ASPAC文化社会センターの現況

資料 ニクソン米大統領、チュウ南ベトナム大統領の共同コミニケ

(一九六九年六月八日ミッドウエー)

資料 ミッドウエー島における大統領の談話(一九六九年六月八日)

世界各国の安全保障条約(二) 四十数カ国の比較研究〔佐藤重徳〕

第一〇六六号 一九六九年八月号

巻頭言 非武装中立と世界連邦〔三好貞雄〕

ガンジーと世界連邦運動〔田中正明〕

世界連邦組織に依り世界平和を〔下中弥三郎(絶筆)〕

危機と平和の構造―世界政府の原理と方法試論〔坂口三郎〕

西ニュー・ギニア(西イリアン) 住民自決問題〔青木出郎〕

西イリアン工作の裏面〔M・I・マンダチャン(萬田知行訳)〕

西パプア独立運動の展望(三) 西イリアン協定の実施をめぐる〔森田大耕〕

資料 パリ和平会談における米代表の公式発言内容(一一)

外交史秘話(五) 北方領土と日露交渉〔大和雄助〕

書評 池田正之輔著『謎の国・中共大陸の実態―民族性と経済基盤の解明』

書評 エドゥアルド・フレイ・モンタルヴァ著 鹿島研究所訳『ラテン・アメリカの運命』

三三―三七

三八―四〇

四一―四二

四二―四三

四四―八二

二―二

三一―一〇

一一―一二

一三―二九

三〇―四二

四三―五一

五二―六七

六八―七五

七六―七八

七九―七九

八〇―八〇

第一〇六七号 一九六九年九月号

卷頭言 ソ連の実情と北方領土問題〔三好貞雄〕

チェコスロバキアの命運―自由失なわれて後の一年〔斎藤忠〕

七二年、核ぬき、本土並み―沖縄返還の目途はつく〔末次一郎〕

南樺太は日本固有の領土である〔西鶴定嘉〕

イリ地区（新疆）における中ソ国境紛争について〔矢野光二〕

中共、知識分子迫害の実情（一）〔余鎮東（黄国彦訳）〕

青木外相の討露の上奏の背景〔河村一夫〕

外交史秘話（六）樺太千島交換条約〔天和雄助〕

資料 第四回閣僚会議に提出されたアスパック文化社会センターに関する報告

〔崔奎夏（横尾和歌子訳）〕

資料 バリ和平会談における米代表の公式発言内容（一一）

国連憲章の解釈原理〔佐藤重徳〕

第一〇六八号 一九六九年一〇月号

卷頭言 コスイギン首相に与う〔三好貞雄〕

愛知外相訪ソ、米の意義〔牧内正男〕

サイゴンから見た ッグナム路線―米軍撤退の及ぼす波紋〔森田大耕〕

北方領土の国際法上の地位〔田村幸策〕

二二二

三二七

八一―一

一一二―二〇

二一―二六

二七―三一

三二―三八

三九―四二

四三―四七

四八―四九

五〇―七八

二―三

五―一三

一四―一八

一九―三〇

プレス・アタシエ論〔福井竜太郎〕

中共、知識分子迫害の実情（二）〔余鎮東（黄国彦訳）〕

外交史秘話（七）江戸時代の長崎貿易〔大和雄助〕

国連総会におけるニクソン米国大統領の演説（一九六九年九月一八日）

ロジャーズ米國務長官の記者会見（一九六九年八月二〇日、ワシントン）

国連憲章における武力行使の禁止―二条四項論〔佐藤重徳〕

第一〇六九号 一九六九年一一・一二月号

巻頭言 日・米両首脳に望む〔三好貞雄〕

アメリカから日本に期待すること―安保是非論〔デビッド・L・オズボーン〕

アメリカのアジア政策は変わる―下田会議から〔永末英一〕

日本人の対ソ連観―まだ資本主義段階にも到達していない〔廣西元信〕

中共、知識分子迫害の実情（三）〔余鎮東（黄国彦訳）〕

青木外相の対露強硬政策の背景―特に、日英同盟の発端に関連して〔河村一夫〕

外交史秘話（八）西南戦争と対外関係〔大和雄助〕

読書評 武藤貞一著『虚妄の世界に生きる』を讀んで〔斎藤忠〕

資料 三多摩シンポジウムにおけるアーミン・マイヤー駐日米大使の演説

資料 アメリカ労働総同盟産別会議（AFL・CIO）第八回大会における

レアード米国防長官の演説（一九六九年一〇月七日、アトランチックシチー）

三一―三六

三七―四六

四七―五一

五二―五六

五七―六三

六四―八五

二―三

四―七

八―一三

一四―二九

三〇―三五

三六―四一

四二―四五

四六―四六

四七―四九

四九―五二

資料 パリ和平会談における米代表の公式発言内容（一—三） 五三一—五八
 国連における武力行使の禁止（続）—二条四項論〔佐藤重徳〕 五九—七五

第一〇七〇号 一九七〇年一月号

巻頭言 一九七〇年に向けて〔三好貞雄〕 二—二

中国の情況変化と今後の路線〔土井章〕 三—九

安保体制の世界史的意義〔田村幸策〕 一〇—二二

国は現実の中に生きる—ヨーロッパを旅行して〔長谷川峻〕 二二—二七

チェコスロバキアと日本、国交関係の沿革〔J・レイナル〕 二八—二九

三国同盟を背景とする日本の対米、対独関係（上）〔春木猛〕 三〇—四七

チベット自治区の珞瑜地区について〔矢野光二〕 四八—五〇

中共、知識分子迫害の実情（四）〔余鎮東（黄国彦訳）〕 五一—五五

外交史秘話（九）阿片禁止と密輸事件〔大和雄助〕 五六—五八

資料 ベトナムに関するニクソン大統領の演説（全容） 五九—六四

（一九六九年一月三日、ホワイトハウス）

資料 ニクソン米大統領とホー・チー・ミンベトナム民主共和国大統領の交換書簡全文

（一九六九年七月—五日付） 六四—六五

資料 ホー・チ・ミン大統領の書簡（一九六九年八月二五日付） 六五—六五

資料 ニクソン米大統領の外国貿易政策教書（一九六九年十一月二八日、議会へ提出） 六六—七〇

国連憲章における集団安全保障(一)〔佐藤重徳〕

七一―八五

第一〇七二号 一九七〇年二月号

巻頭言 日米安保条約の質的变化―社会党は基本路線を変更せよ〔三好貞雄〕

二―三

一九七〇年代のソ連外交―東西の安全保障体制の提案をめぐって〔尾上正男〕

四―九

中ソ交渉の展望〔山村文人〕

一〇―一五

三国同盟を背景とする日本の対米、対独関係(中)〔春木猛〕

一六―二五

資本自由化の論理と現実―ナシヨナリズムとインタナシヨナリズム〔伏見楚代子〕

二六―三二

寒中御見舞一覧

三三―三七

資料 ニクソン米国大統領の一般年頭教書(一九七〇年一月二二日)

三八―四三

キューバ・カストロ革命―国際政治からみた総合研究(四)〔今村之治〕

四四―五二

中共、知識分子迫害の実情(五)〔余鎮東(黄国彦訳)〕

五三―五七

外交史秘話(一〇) 日清修好条規と改正交渉〔大和雄助〕

五八―六〇

国連憲章における集団安全保障(二)〔佐藤重徳〕

六一―七三

第一〇七二号 一九七〇年三月号

巻頭言 アジア国家連合を提唱し「真空地帯」論の虚妄を排す〔三好貞雄〕

二―二

中東和平の行方〔岩永博〕

三―一〇

資料 ニクソン米大統領の外交教書「一九七〇年代の米国の外交政策―平和のための新戦略」

(全文・一九七〇年二月一日)〔アメリカ大使館訳〕

資料 ニクソン米大統領の経済報告抜粋(一九七〇年一月三〇日、議会提出)

資料 ニクソン米大統領の記者会見(一九七〇年一月三〇日)

資料 六月三〇日にはじまる一九七一会計年度のニクソン米大統領の予算教書(抜粋)

(一九七〇年二月三日)

三国同盟を背景とする日本の対米、対独関係(下の二)〔春木猛〕

新刊紹介 浦野起史著『現代国際政治の課題』〔牧内〕

新刊紹介 鹿島平和研究所編『日本外交史』全三三巻・別巻五巻

第一〇七三号 一九七〇年四月号

巻頭言 道義外交を貫け〔三好貞雄〕

中東紛争の基本的性格―ソ連の地中海制覇慾〔田村幸策〕

真の統一朝鮮の実現〔金三奎〕

三国同盟を背景とする日本の対米、対独関係(下の二)〔春木猛〕

通州事件の顛末〔今井武夫〕

中共、知識分子迫害の実情(六)〔余鎮東(黄国彦訳)〕

青木外相の対露強硬政策の背景(補遺)〔河村一夫〕

外交史秘話(一一) 日本海海戦と敗走軍艦〔大和雄助〕

国連憲章における集団安全保障「安保理事会の決定」(三三) 第三九条論(続)〔佐藤重徳〕

一一一七四

七五―七九

七九―八四

八四―八七

八八―一〇二

一〇三―一〇三

一〇三―一〇三

二―二

三―一二

一三一―一六

一七―三〇

三一―三八

三九―四一

四二―四五

四六―四九

五〇―七〇

第一〇七四号 一九七〇年五月号

卷頭言 周恩来首相に与う〔三好貞雄〕

敗戦原因と日本の将来（遺稿）〔半沢玉城〕

日中国交の隘路について―覚書貿易の交渉にみる〔山村文人〕

資料 U・アレクシス・ジョンソン 国務次官

「日本の役割と米国の対極東関係の将来」（一九七〇年四月一〇日）

資料 G・ウォーレン ナッター 国際安全保障担当国防次官補

「軍事援助と対外軍事装備売却」（全容・一九七〇年四月一日）

資料 中東における力の均衡とカンボジア政変の今後

―ロジャーズ米国国務長官の記者会見（全容・一九七〇年三月二三日）

安重根自伝〔崔書勉 紹介〕

三国同盟を背景とする日本の対米、対独関係（下の三）〔春木猛〕

「パリ会談」の資料〔浦野起史〕

第一〇七五号 一九七〇年六月号

卷頭言 ニクソンの決断力〔三好貞雄〕

インドシナ戦争の重大段階とわが国の運命

―わが国と東亜大陸対岸との関係の国際政治的考察〔神川彦松〕

アジア会議の意味するもの〔牧内正男〕

二一三

四一―二九

三〇―三七

三八―四二

四二―四六

四六―五二

五三―七〇

七一―八〇

八一―九四

二一―二

三一―九

一〇―一五

よど号乗取事件について〔長谷川峻〕

一六一―一八

資料 カンボジア進攻に関するニクソン米大統領の記者会見（一九七〇年五月八日）

一九―二四

資料 東南アジア情勢に関するニクソン米大統領の演説（一九七〇年四月三〇日）

二四―二七

資料 カンボジアに関するヨスト米国連大使の安保理議長あて書簡（一九七〇年五月五日付）

二七―二八

三国同盟を背景とする日本の対米、対独関係（下の四）〔春木猛〕

二九―三五

西ドイツの海外広報事業団〔福井竜太郎〕

三六―四一

マイクロネシアの歴史と展望（一）〔松江宏次〕

四二―五〇

中共、知識分子迫害の実情（七）〔余鎮東（黄国彦訳）〕

五一―五四

外交史秘話（一二）日露和親条約と洋船建造〔大和雄助〕

五五―五七

書評 鹿島守之助著・鹿島平和研究所編『日本外交史』第一卷・第二卷〔三宅正樹〕

五八―五九

国連憲章における集団安全保障（四）第三九条論（完）〔佐藤重徳〕

六〇―七四

第一〇七六号 一九七〇年七月号

巻頭言とまどいのソ連外交〔三好貞雄〕

二―三

中共の対日態度を構成する四大要因―日米離反と日本赤化が主要目標〔田村幸策〕

四―一八

ASPACの変容へ―経済協力強化の線〔牧内正男〕

一九―二二

北方領土恢復運動の前進―愈々世論結集時到来〔能戸英三〕

二三―二九

資料 ジョン・R・スチブソン米国務省法律顧問「米軍カンボジア作戦の法的根拠」

（一九七〇年五月二八日ニューヨーク市弁護士協会ハマーシールド・フォーラムでの演説）

三〇―三三

資料 ロジャーズ米國務長官の記者会見

(一九七〇年六月七日CBS番組「フェイス・ザ・ネーション」)

オランダの東洋進出と退場(上)〔青木出郎〕

マイクロネシアの歴史と展望(中)〔松江宏次〕

外交史秘話(一三) 下関戦争と下関償金〔大和雄助〕

第一〇七七号 一九七〇年八月号

巻頭言 社会党の訪ソ外交(?)〔三好貞雄〕

アジア革命戦勢の大転換―北京の全面的同時攻勢〔斎藤忠〕

「内戦」か「侵略戦争」か―ジュネーブ協定は万能薬にあらず〔森田大耕〕

資料 カンボジアに関するニクソン大統領の声明(一九七〇年六月三〇日、サンクレメンテ)

資料 ベトナム派兵諸国閣僚会議の最終コミュニケ全文(一九七〇年七月五日、サイゴン)

資料 新しいパリ会談米首席代表 デービッド・K・E・ブルース大使の略歴

北カリマンタン連邦国家運動(上)(原名・アザハリは何処へ)

〔アハマデ・ハッサン(伊佐益夫訳)〕

マイクロネシアの歴史と展望(下)〔松江宏治〕

中共、知識分子迫害の実情(八)〔余鎮東(黄国彦訳)〕

外交史秘話(一四) 明治前期の攘夷事件〔大和雄助〕

国連憲章における暫定措置(二) 第八節四〇条論〔佐藤重徳〕

三五―四〇

四一―五三

五四―六六

六七―六九

二―二

三―八

九―一四

一五―二三

二四―三五

二五―二六

二七―四四

四五―五二

五三―五六

五七―五九

六一―六九

第一〇七八号 一九七〇年九月号

巻頭言 朝鮮・台湾は日本の生命線か〔三好貞雄〕

自由主義社会のための世界的協力(上)ー日本の対外政策は順調か〔廣田洋二〕

異質の独裁者 毛沢東ーかれ亡きあとに来るもの〔越村衛一〕

三国同盟を背景とする日本の対米、対独関係(下の五)〔春木猛〕

オランダの東洋進出と退場(中)〔青木出郎〕

北カリマンタン連邦国家運動(中)〔原名・アザハリは何処へ〕

〔アハマデイ・ハッサン(伊佐益夫訳)〕

中共、知識分子迫害の実情(完)〔余鎮東(黄国彦訳)〕

書評 上山春平・三宅正樹『世界の歴史(二三) 第二次世界大戦』〔三輪公忠〕

国連憲章における暫定措置(二) 第九節四一条論〔佐藤重徳〕

第一〇七九号 一九七〇年一〇月号

巻頭言 中国承認は重要事項である〔三好貞雄〕

ドル攻勢に耐えられるかー宿命的受難再来のきざし〔武藤貞一〕

日本国憲法と軍国主義〔田畑巖穂〕

W A C Lは何故日本に運ばれたか〔久保木修己〕

資料 対外援助に関するハンナ米国際開発局長官の証言

(一九七〇年九月九日、上院歳出委員会対外活動分科委員会)

二一三

四一五

一六一二一

二二一三一

三二一四七

四八一六三

六四一六六

六七一六九

七〇一七五

二一二

三一七

八一一九

二〇一三三

二四一二七

資料 レアード米国防長官の記者会見（一九七〇年八月二六日・抜粋）

オランダの東洋進出と退場（下）〔青木出郎〕

外交史秘話（一五） 壬午事変と花房公使〔大和雄助〕

書評 鹿島守之助『日本外交史』第三卷・第四卷〔藤村道生〕

キューバ・カストロ革命―国際政治からみた総合研究（五）〔今村之治〕

国連憲章における暫定措置（三） 第一〇節四二条論〔佐藤重徳〕

第一〇八〇号 一九七〇年一一・一二月合併号

巻頭言 日中共同声明を読む〔三好貞雄〕

ナセル死後の中東〔岩永博〕

自由主義社会のための国際協力（下）―高次元な外交基本政策の必要〔廣田洋二〕

資料 東南アジアに関するニクソン大統領の全国向けテレビ演説

（一九七〇年一〇月七日、ワシントン）

資料 和平提案への反響に関するニクソン大統領の非公式談話

（一九七〇年一〇月八日、ジョージア州サバンナ）

資料 ロジャーズ米國務長官の記者会見（一九七〇年一〇月九日、ワシントン・全文）

資料 ロジャーズ國務長官とレアード国防長官のTVインタビュー（抜粋）

（一九七〇年一〇月一日、ABC-TV放送網「イッシュューズ・アンド・アンサーズ」）

資料 第八八回パリ会談におけるブルース米首席代表の発言（一九七〇年一〇月一五日）

二七―三〇

三一―四四

四五―四八

四九―五二

五三―六四

六五―七〇

二―二

三―一三

一四―二一

二二―二四

二四―二九

二九―三四

三五―三九

四〇―四一

- 資料 国連総会におけるヨスト米国連大使の一般演説（全容・一九七〇年九月三〇日） 四二―四八
- 三国同盟を背景とする日本の対米、対独関係（下の六）〔春木猛〕 四九―五三
- 北カリマンタン連邦国家運動（下）（原名・アザハリは何処へ） 五五―七五
- 〔アハマディ・ハッサン（伊佐益夫訳）〕

第一〇八一号 一九七一年一月号

- 卷頭言 虚構を捨てよ―日中国交回復に就て想う〔三好貞雄〕 二―三
- 米中関係改善の可能性―台湾問題と東南アジアが癌 中共の変化を待つのみ〔田村幸策〕 四―一〇
- アジア・太平洋地域における共同体の形成
- ―それへの社会的、文化的アプローチに関する未来学的展望〔姜秉奎〕 一一―二六
- 台湾人の法的地位に関して―「出入国管理法案」との関連から〔森田大耕〕 二七―三一
- 外交時報創刊七五年祝賀署名芳名録 三二―三五
- 李鴻章の親露政策の日本への影響―青木外相の対露強硬政策との関連について〔河村一夫〕 三六―四〇
- 支那事変終末工作と大本営〔今井武夫〕 四一―四六
- 国連憲章における特別協定と他の強制措置〔佐藤重徳〕 四七―六九

第一〇八二号 一九七一年二月号

- 卷頭言 日中国交と台湾問題 道義外交を貫くべきである〔三好貞雄〕 二―三
- アンケート（一）日中国交の具体的方策（二）これに関連して台湾をどう扱うか

- 〔麻生良方・青柳秀夫・青木出郎・今井勝郎・岩村三千夫・今村之治・猪瀬謙一・伊手健一・上田修一郎・上野秀夫・梅原一雄・江尻進・衛藤藩吉・大坪保雄・大井篤・岡本悟・落合忠士・小川芳彦・越智元治・岡本順一・緒方貞子・大西一・大場格之助・大島忠雄・賀屋興宣・上別府親志・亀井貫一郎・川上為治・神川正彦・加藤隆・上条末夫・景山哲夫・加藤大三・川上壮一郎・甲斐田慎二・木村睦男・北岡寿逸・岸田修・経塚作太郎・栗山礼行・桑原寿二・草間秀三郎・具島兼三郎・栗原一夫・小峯柳多・甲谷悦雄・小島徹三・小谷鶴次・近藤三千夫・越村衛一・小島憲一・斎藤忠・斎藤寿・坂田善三郎・崔書勉・佐藤延子・座間勝平・重政庸徳・白井勇・重光蔵・茂森唯士・白鳥令・志村陸城・末松満・杉森久英・菅谷重平・住吉良人・鈴木憲一・杉田幸三・関寛治・瀬尾秀彰・谷口雅春・田川誠一・高木友三郎・田尻愛義・田畑巖穂・高山恒雄・千葉三郎・津久井龍雄・永田亮一・内藤智秀・中川富弥・永井周・中山治一・中原喜一郎・名越二荒之助・西田八郎・西鶴定嘉・西村文夫・花井等・西村虎一・春木猛・長谷川光太郎・畑田重夫・張間利春・平林たい子・広常人世・日比野正明・藤井彰治・福林正之・牧内正男・真鍋一・松本徳明・増子正通・松山幸逸・三ツ林弥太郎・御手洗辰雄・宮崎正雄・三好修・三瀧信吾・宮崎繁樹・宮脇岑生・向井長年・村瀬興雄・武藤貞一・元川房三・森田大耕・毛利敏彦・山中大吉・八森充・吉田之久・吉川兼光・横尾和歌子・横山政朝・和田春生・渡辺政雄・逸名氏〕
- 韓国の貿易・その過去と現状と展望〔安光鎬〕
- 外交時報 七五周年記念祝賀名刺
- 三島事件と平和憲法の再点検(上)〔田畑巖穂〕

四―三二

三三―三七

三八―三八

三九―三五

- 三国同盟を背景とする日本の対米、対独関係（下の七）〔春木猛〕
 資料 ニクソン米大統領の一般教書（一九七二年一月二二日、上下両院合同会議）
 資料 ニクソン米大統領の予算教書（抜粋・一九七一年一月二九日、ワシントン）
 資料 ニクソン大統領の経済報告（全文・一九七一年二月一日、ワシントン）
 資料 米大統領経済諮問委員会の年次報告
 （「国際貿易」「開発途上国援助」の項抜粋・一九七一年二月一日、ワシントン）
 「中国大陸省別地図」と解説について〔越村衛一〕
 書評 長谷川峻著『ひとすじの道』（田畑巖穂）
 書評 倉前義男著『ソ連の新頭脳集団―クレムリン現代闘争史』（曾村保信）
 書評 浦野起史著『ジュネーブ協定の成立』（牧内正男）
 書評 ジョン・W・スバニア著 中村好寿訳『朝鮮戦争と戦略論争』（浦野起史）

第一〇八三号 一九七一年三月号

- 巻頭言 日中国交問題と国際連合（三好貞雄）
 最近の日ソ貿易―特徴的な諸点〔林寧寿〕
 資料 ニクソン大統領外交白書「一九七〇年代の米国の外交政策―平和のための構築」（上）
 （全文・一九七一年二月二五日）
 資料 ニクソン米大統領の記者会見（一九七二年二月一七日ワシントン）
 米国の対アジア政策の形成（一九四五―一九五五年）〔上野英詞〕

アンケート(一) 日中国交の具体的方策(二) これに関連して台湾をどう扱うか(二)

〔木下彪・角田時雄・中沢伊登子・三宅正樹・東泰介〕

三島事件と平和憲法の再点検(中)〔田畑巖穂〕

国連憲章における集団自衛権(一)〔佐藤重徳〕

第一〇八四号 一九七一年四月号

巻頭言 どつしり構えよ〔三好貞雄〕

台湾が独立宣言を行なえば世界的難問題は直ちに解決〔武藤貞一〕

ニクソン外交の道標―外交白書報告の意義〔牧内正男〕

資料 ニクソン大統領外交教書「一九七〇年代の米国の外交政策―平和のための構築」(下)

(全文・一九七一年二月二五日)〔アメリカ大使館訳〕

三島事件と平和憲法の再点検(下)〔田畑巖穂〕

第一〇八五号 一九七一年五月号

巻頭言 台湾民衆の意思を問え〔三好貞雄〕

日中国交正常化慎重論〔落合忠士〕

東バキスタン独立運動の内幕(上)〔桐生稔〕

「北方領土問題はすでに解決済み」というソ連邦主張の源流を求めて〔遠藤晴久〕

文明開化に抗した国民主義者内藤湖南の中国観とその人〔鈴木英史〕

四六一四八

四九一六六

六七一七四

二一一二

三一五

六一一

二二一八七

八九一〇五

二一一二

三一一五

一六一二一

二二一四一

四二一四四

義井博著『昭和外交史』を読んで〔大井篤〕 四五―四六
 国連憲章における集団自衛権 (二)〔佐藤重徳〕 四七―五六

第一〇八六号 一九七一年六月号

巻頭言 再び国民政府に提言する―速かに台湾独立の宣言を〔武藤貞一〕

国連外交と中国〔田尻愛義〕 四―一七

革命未だ成功せず―辛亥革命から六〇周年目を迎えて〔森田大耕〕 一八―二四

東バ独立運動の内幕(中)―独立の条件〔桐生稔〕 二五―三〇

第一回のゴムルカ時代―一九四五―一九四八〔リチャード・ピスコックス(遠藤晴久訳)〕 三一―四六

日英同盟締結前後に於ける独逸の動き〔河村一夫〕 四七―五三

国連憲章における集団自衛権(三)〔佐藤重徳〕 五四―六五

第一〇八七号 一九七一年七月・八月号

巻頭言 ニクソンの詭道外交と日本〔三好貞雄〕 二―二二

米中ソ関係と日本外交〔田中直吉〕 三―二二

新局面のソ連外交〔茂森唯士〕 二三―二八

東バ独立運動の内幕(下)〔桐生稔〕 二九―三九

ポーランド、それは奈落への橋渡しか? (一)〔リチャード・ヒスコックス(遠藤晴久訳)〕 四〇―四四

書評 矢田部厚彦著『核兵器不拡散条約論―核の選択をめぐる』〔牧内正男〕 四五―四五

書評 池田正之輔著『シナ民族性の解明』について〔越村衛一〕

四六一―四七

書評 ゲルト・レッツシンク著 佐瀬昌盛訳『ヤルタからポツダムへ』〔遠藤晴久〕

四八一―五四

国連憲章における集団自衛権（四）〔佐藤重徳〕

五五一―七一

第一〇八八号 一九七一年九月号

巻頭言 中国問題は「慎重」に〔三好貞雄〕

二―二

韓日協力と国際情勢〔李東元〕

三―七

米中接近の国際政治的環境〔斎藤忠〕

八一―一五

PRC第三のターニング・ポイント―客観的合理性と主観的能動性の統一〔土井章〕

一六一―二一

ニクソン・ショックと戦後日本人の異常体質（上）〔大嶋忠雄〕

二二―二八

ポーランド、それは奈落への橋渡ししか？（二）〔リチャード・ヒスコックス（遠藤晴久訳）〕

二九―四二

地域的取極及び地域的機関に基づく力の行使（一）〔佐藤重徳〕

四三―五八

第一〇八九号 一九七一年一〇月号

巻頭言 再びニクソン外交を排す〔三好貞雄〕

二―三

東亜国際政治の変局と日中問題―孤立無援でわが国が「日中問題」に取組めば

無条件降伏とわが国の左翼革命以外に途はない〔神川彦松〕

四―一二

日米の新関係〔牧内正男〕

一三―一八

ニクソン・ショックと戦後日本人の異常体質（下）

「西欧民主主義十占領政策」虚像的脱国家時代」の日本の悲劇〔大嶋忠雄〕

一九〇〇年の極東の政局と青木外相の決断〔河村一夫〕

ポーランド、それは奈落への橋渡しか？〔三〕〔リチャード・ヒスコックス（遠藤晴久訳）〕

総会による武力行使（一）〔佐藤重徳〕

一九二五

二六―三三

三四―四七

四八―五九

第一〇九〇号 一九七二年一・二二月合併号

巻頭言 中共政権承認の前提〔三好貞雄〕

日本外交の混乱と立直しの必要〔廣田洋二〕

韓国民族思想と韓日関係〔李瑄根〕

北朝鮮の外交―過去・現在・未来〔姜英勲〕

アジアの将来を考える九ヶ国共同委員会東京総会報告（一九七一年一〇月三〇日）〔木内信胤〕

書評 この人と業績 西侯昭雄氏の『国際法研究』を讀みて〔大平善悟〕

キューバ・カストロ革命―国際政治からみた総合研究（六）〔今村之治〕

ポーランド、それは奈落への橋渡しか？（四）〔リチャード・ヒスコックス（遠藤晴久訳）〕

二二―二六

二七―三二

三三―三四

三五―四九

五〇―五八

第一〇九一号 一九七二年一月号

巻頭言 失敗を続けるアメリカ外交〔三好貞雄〕

対等の日中交渉を〔鍋山貞親〕

中東紛争の経過と展望〔岩永博〕

二―四

五―八

九―一五

ジブラルタルを挟む英・西外交戦―「欧州の沖繩」ジブラルタル〔西俣昭雄〕

セオドア・ローズベルト大統領のサガモア・ヒル邸〔松村正義〕

ポーランド、それは奈落への橋渡しか？（五）〔リチャード・ヒスコックス（遠藤晴久訳）〕

総会による武力行使（二）〔佐藤重徳〕

一七―二六

二七―三四

三五―五一

五二―五九

第一〇九二号 一九七二年二月号

巻頭言 バングラ・デシユを徹底援助せよ〔三好貞雄〕

アジアに「冷戦構造」到来―印パ戦争における中ソ米角逐の解剖〔林三郎〕

台湾の帰属は未解決だ―日本は対日平和条約に背けない〔田村幸策〕

中国社会の遠心性と求心性〔山村文人〕

資料 ニクソン米大統領の一般教書（一九七二年一月二〇日）〔アメリカ大使館訳〕

キューバ・カストロ革命―国際政治からみた総合研究（七）〔今村之治〕

ポーランド、それは奈落への橋渡しか？（六）〔リチャード・ヒスコックス（遠藤晴久訳）〕

総会による武力行使（三）〔佐藤重徳〕

八一―一

一二―一六

一七―二二

二二―三五

三六―四七

四八―五九

第一〇九三号 一九七二年三月号

巻頭言 米中会談は果して東亜の緊張を緩和したか〔三好貞雄〕

ニクソン大統領訪中の成果―偉大な対内、対外的影響〔田村幸策〕

米中首脳会談のバランスシート〔上別府親志〕

二―四

五―一二

一三―二〇

ニクソン訪中とソ・中の対日外交宣伝攻勢〔甲谷悦雄〕

二一―二四

資料 一九七〇年代のアメリカ外交政策 浮上する平和構造（上）

ーリチャード・ニクソン大統領の議会への報告（一九七二年二月）〔アメリカ大使館訳〕

二五―六八

新刊紹介『鹿島守之助外交論選集（一） 日本外交の展望』〔長田研一〕

六九―七一

第一〇九四号 一九七二年四月号（バンングラデシュ特集号）

巻頭言 沖縄秘密文書の暴露について〔三好貞雄〕

二―三

バンングラデッシュに使用してーネパール・印度も訪ねて〔長谷川峻〕

五―一六

バンングラデッシュを訪れてーラーマン首相、チョードリ大統領の印象〔崔書勉〕

一七―二七

バンングラデッシュ独立をめぐる諸問題（そのA）〔青野博昭〕

二八―三四

資料 一九七〇年代のアメリカ外交政策 浮上する平和構造（中）

ーリチャード・ニクソン大統領の議会への報告（一九七二年二月）〔アメリカ大使館訳〕

三五―七四

書評 菊地正著『現代国際法論』（上）を読む〔今村之治〕

七五―七七

第一〇九五号 一九七二年五月号

巻頭言 沖縄秘密文書と社会党〔三好貞雄〕

二―二

戦争の反省と米中、日中外交〔田尻愛義〕

三―一五

バンングラデッシュ独立をめぐる諸問題（そのB）〔青野博昭〕

一六―二二

資料 タイの政変と革命団布告〔上野英詞〕

二三―二七

資料 一九七〇年代のアメリカ外交政策 浮上する平和構造 (下)

ーリチャード・ニクソン大統領の議会への報告 (一九七二年二月) (アメリカ大使館訳)

書評 義井博著『国際関係史』(村島滋)

二八―五九
六〇―六三

第一〇九六号 一九七二年六月号

巻頭言 米ソ首脳会談と世界政策 (三好貞雄)

米ソ首脳会談の経過とその成果 (牧内正男)

バン格拉デシユをめぐる諸問題 (そのC) (青野博昭)

西独憲法下における選挙制度の歴史的考察 (村田孝雄)

資料 ベトナムの政党 (グエン・ゴク・ワイ) (三井光夫訳)

ポーランド、それは奈落への橋渡しか? (七) (リチャード・ヒスコックス (遠藤晴久訳))

平和のための統合決議 (佐藤重徳)

二―二
三―八
九―一四
一五―二七
二八―三四
三五―四三
四五―五九

第一〇九七号 一九七二年七月号

巻頭言 新内閣の課題 II 日中・日ソ交渉 (三好貞雄)

国防会議と文民統制 (林一郎)

言論報道の自由と記者道徳の再建について (マスコミ偏向に反対する市民会議)

(提唱者 稲葉秀三・小野秀雄・唐島基智三・高田元三郎・細川隆元・御手洗辰雄)

バン格拉デシユ独立をめぐる諸問題 (そのD) (青野博昭)

二〇―二〇
二一―二六

二―二
三―一九

- 資料 ムルングシ宣言と経済のザンビア人化(上)〔菅野亮子〕 二七―三八
 ポーランド、それは奈落への橋渡しか? (八)〔リチャード・ヒスコックス(遠藤晴久訳)〕 三九―五二
 書評『武藤貞一評論集 脱占領体制篇』〔三好貞雄〕 五三―五五

第一〇九八号 一九七二年八月号(韓国特集号)

- 巻頭言 南北平和統一の共同声明に就て〔三好貞雄〕 二―二
 日本人としての韓国への期待〔木内信胤〕 三一―六
 アスパックの新しい座標―共栄への協力基盤再定立〔李東元〕 七―一三
 韓国より帰りて〔金山政英〕 一四―一七
 韓国外交の座標―南北共同声明の前後を中心に〔崔鍾起〕 一八―二九
 朝鮮に於ける南北問題〔植田捷雄〕 三〇―三四
 韓国経済の発展段階と経済協力の課題〔高承済〕 三五―四〇
 国際情勢と東北アジア―韓半島と日本を中心として〔咸秉春〕 四一―四五
 韓半島に於ける三八度線問題等の歴史的考察〔李瑄根〕 四六―五一
 韓半島統一と日本人の立場〔筑波常治〕 五二―五四
 南北共同声明、その後のソウル―金鍾泌国務総理会見記〔崔書勉〕 五五―五八

第一〇九九号 一九七二年九月号

巻頭言 韓国国務総理金鍾泌氏との会見

一 日中国交正常化について田中首相に訴える〔三好貞雄〕

日米首脳会談を解剖するー自主的多角外交の展開へ〔牧内正男〕

脱イデオロギー時代のソ連外交の実態〔尾上正男〕

状況倫理から落ちた台湾と日本の認識ー外交は経済問題だけに終始しうるか〔池田龍紀〕

バングラデシュをめぐる諸問題（そのE）〔青野博昭〕

韓国統一問題と国際法〔盧明濬〕

二十世紀初盤期の韓半島情勢と今日〔李鍾麟〕

資料 ムルングシ宣言と経済のザンビア人化（下）〔菅野亮子〕

第一一〇〇号 一九七二年一〇・一一月号

巻頭言 日中国交正常化の後に来るもの〔三好貞雄〕

アンケート 「日中共同声明に対する評価乃至批判」「対台湾、対ソ連政策はどうすべきか」

「これからの日本のアジア外交はどうあるべきか」

〔東季彦・阿久沢英男・赤尾敏・安部博純・青木出郎・江頭教馬・江木武彦・衛藤藩吉・

遠藤晴久・藤田信勝・古谷茂・藤田義光・後藤義隆・具島兼三郎・後藤乾一・林三郎・

松垣徳太郎・畑田重夫・林理介・広井大三・服部実・日比野正明・萩原幽香子・今井武夫・

伊手健一・池亀貞雄・石田栄雄・今井勝郎・稲垣整・岩村三千夫・生島廣治郎・伊藤皓文・

伊東大太郎・岸田修・金田近二・金山政英・気賀健三・倉前義男・栗原健・香西茂・

甲谷悦雄・片山哲・草間秀三郎・栗山礼行・桑原寿二・黒羽茂・上別府親志・笠原正明・

二一三

四一九

一〇一八

一九一六

二七一七

三九一四

四七一五

五四一六

二一三

- 川上壮一郎・神川正彦・古賀雷四郎・加藤隆・黄昭堂・許世楷・上条末夫・粕谷進・
 近藤真男・三好修・森田大耕・牧内正男・前原光雄・松尾弘・宮崎正雄・宮崎繁樹・
 松下正寿・向井長年・元川房三・三瀧信吾・皆川洗・丸山繁郎・武藤貞一・三宅正樹・
 真鍋一・鍋山貞親・内藤智秀・永田一郎・西村熊雄・中山治一・岡本悟・大平善梧・
 大井篤・大島忠雄・大田政作・小川信孝・大場格之助・奥野栄・沖野亦男・落合忠士・
 越智元治・大原実・末次一郎・芹田健太郎・鈴木広・白鳥令・関戸辰蔵・瀬戸山三男・
 菅谷重平・茂森唯士・白井正・末松満・清水良三・坂田善三郎・杉沢昭一・瀬尾秀彰・
 斎藤忠・進藤栄一・鈴木憲一・高木友三郎・鳥居信之・橘善守・谷口雅春・田中清明・
 田中栄一・土屋茂樹・田中俊郎・高瀬浄・高山恒雄・高野雄一・角田時雄・上田修一郎・
 浦野起央・宇野重昭・梅原一雄・渡嘉敷一郎・山本節士・山室英男・山本豊・矢部鈞次・
 山田晟・安岡正篤・座間勝平・匿名氏・小峯柳多・西田八郎・松本善明・星野力・
 横尾和歌子・大畑篤四郎
- ソ連に使用して北方領土問題を平和条約交渉に〔福田篤泰〕 四一六二
 六三一六七
 六八一七六
- 戦乱のなかの和平―ベトナム戦争の現段階〔青野博昭〕

第一一〇一号 一九七二年二月号

巻頭言 ベトナム和平について思うこと〔三好貞雄〕 二一二

三極構造へ日中の波紋―中ソ外交と日本の立場〔茂森唯士〕 三一六

アダム・スミスの防衛論〔伊藤皓文〕 七一三

危険な愚論の横行を許すな―日中国交正常化について心すべきこと〔田村幸策〕

ソ連・東欧を訪ねて〔長谷川峻〕

一大兵器廠 中国大陸に出現か 武力解放勢力の投げ網にかかる

―ものに怖じない自民三派連合政権〔大島忠雄〕

国連憲章に基づく武力行使の可能性〔佐藤重徳〕

第一一〇二号 一九七三年一月号

巻頭言 アジア国家連合への途〔三好貞雄〕

中ソの対立とアジア太平洋の安全〔土井章〕

中国平和共存外交の新段階〔上別府親志〕

試行錯誤行き悩む中国の教育改革〔藤井彰治〕

外交は切れたが国交は続いている〔李嘉〕

またもや誤てり日本!!―日本の未来像への憶測〔アジアの小民（中華民国の有力者の匿名）〕

『ポスト・ベトナム』序章〔青野博昭〕

米・ソ両極体制―起因・終焉・評価〔宇津野常人〕

第一一〇三号 一九七三年二月号

巻頭言 ベトナム和平の解釈はグローバルに〔三好貞雄〕

アジア経済外交当面の課題〔牧内正男〕

一四―一七

一八―二五

二六―四三

四四―六一

二―二

三―八

九―一五

一六―二三

二四―二六

二七―三五

三六―四五

四六―五六

二―二

三一―六

ベトナム和平後の東南アジア〔林理介〕

七一―二

国家と防衛―ホップズの理論をめぐって〔伊藤皓文〕

一三―三九

北方問題早期解決のために―アメリカ各地を巡って〔能戸英三〕

四〇―四七

資料 一九七二年タイ王国憲法の公布〔上野英詞〕

四九―五三

第一一〇四号 一九七三年三月号

巻頭言 ベトナム戦争の世界史的意義―浮薄な北ベトナム戦勝説を駁す〔田村幸策〕

二一―六

ベトナム和平の成立(上)〔浦野起央〕

七―二二

ベトナム関連資料(その一)

二二―六三

第一一〇五号 一九七三年四月号

巻頭言 東西安保・協力条約―対共産圏への自由主義圏の反攻〔三好貞雄〕

二一―二

ベトナム和平の成立(中)〔浦野起央〕

三一―九

ベトナム関連資料(その二)

二一―四六

ラオスにおける平和の条件〔青野博昭〕

四七―五二

西カリマンタンにおける共産ゲリラとダヤク族(上)〔森田大耕〕

五三―六一

第一一〇六号 一九七三年五・六月合併号

巻頭言 日本に共産革命の理由も必要もない―共産化の助産婦はマスコミ〔田村幸策〕

二一―四

ベトナム和平の成立(下)〔浦野起史〕

五二―五

ベトナム問題年表(一九七〇―一九七三)

二六―五〇

ベトナム関連資料(その三)

五一―六八

プノンペン政府の危機〔青野博昭〕

六九―七五

書評 対外経済協力の促進方策を検討するための実務参考資料として

―鹿島平和研究所の対外経済協力大系について〔中村今朝雄〕

七六―七七

第一一〇七号 一九七三年七月号

巻頭言 国際政治にも国際道徳は必須―日本の対米外交には倫理が欠如か〔田村幸策〕

二―三

毛沢東、最後の闘争へ―文革派による後継体制づくりを急ぐ〔伊藤喜久蔵〕

四―一九

国共対決の微妙な変化〔上別府親志〕

二〇―二六

ベトナム関連資料(その四)

二八―七一

第一一〇八号 一九七三年八月号

巻頭言 心情外交と打算外交〔三好貞雄〕

二―二

低迷続く中東情勢〔岩永博〕

三―九

西カリマンタンにおける共産ゲリラとダヤク族(下)〔森田大耕〕

一〇―二〇

書評 メッケルと日本陸軍―ケルスト博士の『メッケル研究』を読んで〔角田順・三宅正樹〕

二一―二八

パリ協定の実施状況と協定実施に関する共同声明〔浦野起史〕

二九―三八

ベトナム関連資料(その五)	三九―四六
ベトナム関係文献〔浦野起央〕	四七―五二

第一一〇九号 一九七三年九月号

巻頭言 悪魔と会食するには長匙を要す

―日ソ首脳会談について田中首相に餞する〔三好貞雄〕	二―四
---------------------------	-----

ソ連の「緊張緩和攻勢」の真意〔甲谷悦雄〕	五―一六
----------------------	------

日米首脳会談と今後の両国関係〔牧内正男〕	一七―二二
----------------------	-------

アフガニスタン・クーデターと西アジアの危機―その歴史的回顧と将来への危惧〔林理介〕	二三―三一
---	-------

大詰にきたカンボジア情勢〔青野博昭〕	三二―三五
--------------------	-------

田中外交一年の勤務評定―見逸されている日中正常化外交失敗〔椋木瑳磨太〕	三六―四一
-------------------------------------	-------

アメリカ、キューバ間のハイジャッキング防止協定瞥見〔菊地正〕	四二―四五
--------------------------------	-------

明治十四年のハワイ皇帝来朝について〔河村一夫〕	四六―五〇
-------------------------	-------

書評 鹿島平和研究所の対外経済協力大系の「重要資料集」について〔中村今朝雄〕	
--	--

第一一一〇号 一九七三年一〇・十一月合併号

日ソ首脳会談と今後の日ソ関係〔尾上正男〕	二―八
----------------------	-----

首相訪欧ソの成果〔牧内正男〕	九―一六
----------------	------

強制される不安な平和―ラオス和平議定書の調印によせて〔青野博昭〕	一七―二一
----------------------------------	-------

印パ戦争の経緯・バングラデシユの独立

「開発への試練」最近のバングラデシユ経済〔桐生稔〕

印パ戦争とその終結経緯並びにその関連資料〔上野英詞〕

国連における第三次印パ戦争の審議―バングラディシユの独立をめぐる〔下羽友衛〕

第二一一号 一九七三年二月号（中東戦争特集号）

巻頭言 自主外交確立の正念場〔三好貞雄〕

中東和平会議の行方〔岩永博〕

第四次中東戦争の過程と中東和平の展望〔浦野起央〕

第四次中東戦争の資料（上）〔浦野起央・上野英詞編〕

中近東関係文献解説（一）―国際政治からみた最近の文献から〔今村之治〕

第二一二号 一九七四年一月号

巻頭言 中国大陸の命運

―北京はなぜ孔子の教義を怖れるのか なぜ始皇帝の焚書坑儒を礼讃するのか〔田村幸策〕

わが国外交の進路―新しい年を迎えて〔大平正芳〕

多角的「訪問外交」の展開〔牧内正男〕

中国西部における対ソ戦準備についての一考察〔矢野光二〕

中東問題特集

二二―二六

二七―四四

四五―五三

二―二

三―九

一〇―四〇

四一―四八

四九―五五

二―四

五―九

一〇―一五

一六―二二

日本の中東外交の背景と展望〔エフド・ハラリ〕

一三一—三一

第四次中東戦争の資料（二）〔浦野起央・上野英詞編〕

三二—三七

資料 中東問題に関する二階堂官房長官談話（一九七三年一月二二日）

三八—三八

資料 イスラエル政府声明

— 日本政府の新中近東政策に対するイスラエル側の公式見解（一九七三年一月二五日）

三八—三九

資料 エルサレムポスト社説「日本の降伏」（一九七三年一月二三日付）

四〇—四〇

中近東関係文献解説（二）— 国際政治からみた最近の文献から〔今村之治〕

四一—四五

書評 寺本婉雅著・横地祥原編『蔵蒙旅日記』（矢野生）

四五—四五

第一一一三号 一九七四年二・三月合併号

巻頭言 外交は道義と正道とを濶歩せよ〔三好貞雄〕

二—二

アラブ石油禁輸問題の国際政治的考察〔神川彦松〕

三—九

危機をはらむ石油外交—米仏対立に終った主要石油消費国会議〔林理介〕

一〇—一四

第四次中東戦争の資料（三）〔浦野起央・上野英詞編〕

一五—二五

大韓民国はなぜ緊急措置を取らざるをえなかったか〔李秉禧〕

二六—三二

中国外交政策の焦点—喬冠華中国国連代表の国連総会報告をめぐって〔帆足計〕

三三—三九

惠州事件について〔河村一夫〕

四〇—四四

第一一四号 一九七四年四月号

卷頭言 キッシンジャー外交の功過〔三好貞雄〕

二一七

中ソ関係と批孔・ソ氏（ソルジェニーツィン）追放特集号

中国の批孔キャンペーンと対外政策〔土井章〕

四一七

体質としての言論拘束―ソ氏追放と批孔運動〔津久井龍雄〕

八一―一

ソ連政権の恐怖的性格を再確認―ソ連史の真実を描くソルジェニチン〔田村幸策〕

二二―一七

日中関係の現状と過去〔鍋山貞親〕

一八―二三

孔子思想と中華文化〔呉経熊（藤井彰治訳）〕

二四―二九

ソ連に対決する中国の計算〔上別府親志〕

三〇―三六

第四次中東戦争の資料（四）〔浦野起央・上野英詞編〕

三七―五四

第一一五号 一九七四年五月号

卷頭言 世界経済会議を開け〔斎藤栄三郎〕

二一三

中東情勢と日本〔地引嘉博〕

四一―一三

国際通貨安定それへの一提言〔長谷川光太郎〕

一四―一八

国際保障の有効性を信じる者はいるか〔アラン・ドウテイ〕

一九―二四

フセインのヨルダン連合王国構想とイスラエルの反応〔浦野起央〕

二五―三五

イスラエルの第八回総選挙と各政党の立場〔浦野起央〕

三六―四八

第四次中東戦争の資料（五）〔浦野起央・上野英詞編〕

四九―五八

第一一六号 一九七四年六・七月合併号

巻頭言 日韓関係を憂う〔三好貞雄〕

二一四

ニクソン大統領の訪ソと米ソ関係〔館山彰〕

五一九

アジア解放の第四ラウンド〔田中正明〕

一〇一八

北鮮における日本人妻の窮状に関する永末英一議員の質問〔崔書勉〕

一九一四

日中航空協定で、何故中国西北部を通させないか〔矢野光二〕

二五二八

サモヒン文書は本当に「重要極秘情報」か？―その真憑性を論ず〔竹中重寿〕

二九一三三

ウジャマア―アフリカ社会主義の基礎〔ジュリアス・ニエレレ（菅野亮子訳）〕

三四一四一

アラブ・イスラエル紛争の現段階〔バーナード・ルイス〕

四二一四八

第一一七号 一九七四年八月号

巻頭言 日米外交の新転換〔三好貞雄〕

二一二

日加経済関係の展望〔斎藤邦彦〕

三一五

第三世界の核拡散ブーム〔千種光夫〕

六一一

核兵器不拡散条約批准の条件〔斎藤忠〕

二二一八

北鮮の国内情勢と対韓工作〔宇田川四郎〕

一九一二五

厦門事件について〔河村一夫〕

二六一三〇

中東戦争の資料（六）〔浦野起央・上野英詞編〕

三一一四〇

第一一八号 一九七四年九月号

巻頭言 日本外交の根本姿勢について〔三好貞雄〕

四一四

〔国際経済の現状について〔渡辺幸則〕〕

五一〇

ポルトガル政変と植民地問題〔青木出郎〕

一一一三一

中国未完の革命（一）―批林批孔運動と社会主義建設〔上別府親志〕

三二一三八

第一一九号 一九七四年一〇月号

巻頭言 外交は国力の反映である〔三好貞雄〕

二一二

核兵器拡散防止条約と日本〔H・O生〕

三一七

資源外交の突破口―「対話と協調」による多角外交〔牧内正男〕

八一―一五

インド洋における米ソ海軍の覇権争い〔竹中重寿〕

一六一―二四

日本とアフリカ〔浦野起央〕

二五一―四三

第一二〇号 一九七四年十一月号

巻頭言 中国革命の特異性〔三好貞雄〕

二一二

中国の現在と将来〔武藤貞一〕

三一―一七

首相三国歴訪の意義と成果〔牧内正男〕

一八一―二二

空転する農民・農村政策―中国未完の革命（二）〔上別府親志〕

一一三―一三二

満洲事変勃発前後に於ける宣統帝侍臣の動き

―特に陳宝琛と羅振玉との関係について〔河村一夫〕

三三一―四一

第一一二二号 一九七四年二月号

巻頭言 北方領土の主権は日本に存在〔田村幸策〕

二一五

毛沢東の革命像―中国未完の革命(三)〔上別府親志〕

六一―四

中国文化大革命総括の現状

―豪州労働党訪中使節団参加ロス・テリル教授著『中国の自由』紹介〔帆足計〕

一五―二三

中東戦争の資料(七)〔浦野起央・上野英詞編〕

二四―三一

中国の核戦略についての一考察〔矢野光二〕

三二―三三

第一一二三号 一九七五年一・二月合併号

巻頭言 核外交確立の要望〔三好貞雄〕

二一二

世界的展望の下に長期的視野に立った外交を〔宮沢喜一〕

三一四

日米新時代―フォード大統領を迎えて〔松浦晃一郎〕

五一―〇

転機にたつ中東和平〔岩永博〕

一一―一六

イスラエルが強硬態度を取る理由〔トビア・ブルメンタール〕

一七―一九

その後のポルトガル政情と植民地問題(上)〔青木出郎〕

二〇―二七

文化革命という名の体制内改革(上)―中国未完の革命(四)〔上別府親志〕

二八―三五

第一一二三号 一九七五年三月号

巻頭言 アメリカの石油戦略〔三好貞雄〕

国際政治と文明論よりみた世界の現状と将来〔神川彦松〕

中ソ関係の展望〔小泉真之〕

第四期人民代表大会の意義〔土井章〕

その後のポルトガル政情と植民地問題（下）〔青木出郎〕

二二二

三一〇

一一一九

二〇一四

二五一三五

第一一二四号 一九七五年四月号

巻頭言 米国敗退の根本原因〔三好貞雄〕

わが対中南米外交の回顧と展望〔中曾根悟郎〕

未完の闘争―第四回全国人民代表大会の意味と今後〔伊藤喜久蔵〕

文化革命という名の体制内改革（中）―中国未完の革命（五）〔上別府親志〕

戦う外務省たれ―OB大使大いに語る〔長山義男〕

清国特派使節劉学詢の行動について―清末官僚の官海遊泳術の一例〔河村一夫〕

二二二

三一二

一三一二〇

二一―二八

二九―三四

三五―四〇

第一一二五号 一九七五年五月号

巻頭言「経験」か「反省」か〔三好貞雄〕

インドシナ危局と日米関係〔牧内正男〕

軌道に乗った国際協力事業団〔内田勝久〕

二二二

三一六

七一―二二

国連大学について〔黒川剛〕

一三一―一九

文化革命という名の体制内改革（下）―中国未完の革命（六）〔上別府親志〕

二〇―二八

資料 ビルマ連邦社会主義共和国憲法（上）〔西修〕

二九―三八

第一二二六号 一九七五年六月号

巻頭言 原則とは何ぞや―覇権問題の一考察〔三好貞雄〕

二―二

日中平和友好条約の目的と性格を問う〔田村幸策〕

三―四

エネルギー資源問題の行くえ〔片倉邦雄〕

五―一〇

外務省受難史―満洲事変から終戦まで〔長山義男〕

一一―二一

文化革命の落し子・林彪事件―中国未完の革命（七）〔上別府親志〕

二二―二九

資料 ビルマ連邦社会主義共和国憲法（下）〔西修〕

三〇―三八

第一二二七号 一九七五年七月・八月合併号

巻頭言 日中平和友好条約締結への途〔三好貞雄〕

二―二

第三次国連海洋法会議―新しい海洋秩序への模索〔黒河内久美〕

三―一

その後のポルトガル政情と植民地解放問題〔青木出郎〕

一一―二五

我国インフレの前途の若干の見透しとアジア諸国との友好連帯並びに

日中平和友好条約の締結について〔帆足計〕

二六―三三

批林批孔運動と階級闘争史観（上）―中国未完の革命（八）〔上別府親志〕

三四―四二

新刊紹介 浦野起央編著「中東国際関係資料集」〔石原政孝〕

四三一—四三

第一一二八号 一九七五年九月号

巻頭言「朝鮮半島の平和」〔三好貞雄〕

二—二

南米二カ国訪問を終えて〔福田越夫〕

三—四

ブラジル概観〔外務省アメリカ局中南米課〕

五—一四

新転機にたつ日米関係―三木訪米とシュレジンジャー来日〔牧内正男〕

一五—二一

三宅正樹氏の『日独伊三国同盟の研究』を読んで

松岡洋右の思い出〔岡村二一〕

二二—三二

「日独防共協定」にまつわる回想〔松崎昭一〕

三二—三七

確立された三宅史学〔義井博〕

三七—四五

第一一二九号 一九七五年一〇月号

巻頭言 中国の第三世界論〔三好貞雄〕

二—二

インドシナをめぐる中ソの動向〔小泉真之〕

三—九

国際人道法について〔上岡克彦〕

一〇—一八

批林批孔運動と階級闘争史観（下）―中国未完の革命（九）〔上別府親志〕

一九—二七

永遠の恩人・パール博士を偲んで

パール・下中記念館設立由来〔田中正明〕

二八—三〇

聖者・パール博士〔志村陸城〕

座談会 日本の無罪―パール博士の信念〔A・M・ナイル、田中正明、竹村吉右衛門〕

三一―三二

三三―三四

第一一三〇号 一九七五年一一・一二月合併号

巻頭言 日本の南北問題〔三好真雄〕

二―二

動勢つづく中東世界〔岩永博〕

三―八

金銀複本位への復活〔長谷川光太郎〕

九―一三

その後のポルトガル政情と植民地問題〔上〕〔青木出郎〕

一四―二〇

儒教批判と社会主義革命〔上〕―中国未完の革命〔二〇〕〔上別府親志〕

二一―三〇

あの頃の上海〔一〕―終戦前後の憶い出〔長山義男〕

三一―三九

第一一三一号 一九七六年一月号

巻頭言 グロムイコは健忘症でも国際会議の記録は不滅〔田村幸策〕

二―八

新太平洋ドクトリンを論評する―連型大陸同盟とアメリカ型海洋協商との対決・

両者の優劣、日本の運命は太平洋共同体〔神川彦松〕

九―一五

儒教批判と社会主義革命〔下〕―中国未完の革命〔一一〕〔上別府親志〕

一六―二四

その後のポルトガル〔下〕〔青木出郎〕

二五―三六

あの頃の上海〔二〕〔長山義男〕

三七―四〇

第一一三二号 一九七六年二月号

巻頭言 デタントの正体を冷静に見よ〔三好貞雄〕

中国の経済戦略の変化と対外関係〔土井章〕

フォード大統領の訪中をめぐる米中関係の現状と将来〔橋本宏〕

中国の工業化と革命路線―中国未完の革命（一二）〔上別府親志〕

第三〇回国連総会を顧みて〔杉内直敏〕

あの頃の上海（三）〔長山義男〕

第一一三三号 一九七六年三月号

巻頭言 ソ連の猛省を促す〔三好貞雄〕

転機にたつ ASEAN〔牧内正男〕

中国はどこへいく？〔藤井彰治〕

世代交替期の中国指導部―中国未完の革命（二三）〔上別府親志〕

新しい反ユダヤ主義〔シユローモ・アブネリ〕

海外子女教育の現状〔小関利武〕

あの頃の上海（四）〔長山義男〕

第一一三四号 一九七六年四・五月合併号

巻頭言 タイ総選挙の意味するもの〔三好貞雄〕

二二二

三一六

七一三

一四一三二

一三一三〇

三一三三四

二二二

三一七

八一二

一三一二一

二二二二六

二七一一三

三三一一三八

二二二

キッシンジャー長官の中南米訪問〔伊神修〕

三一―二

米州機構憲章の改正問題〔外務省アメリカ局・中南米第一課〕

一三―二三

ソ連共産党第二五回大会の特徴と今後の課題〔竹中重寿〕

二四―二八

解放軍の人脈形成の諸条件（上）―中国未完の革命（一四）〔上別府親志〕

二九―三七

第一一三五号 一九七六年六月号

巻頭言 印ソ間のギクシヤクは何を語るか〔三好貞雄〕

二―二

社会主義・共産主義とは何であったのか〔尾上正男〕

三―九

ミンダナオ島の回教徒反乱軍の実体を現地に見る〔竹中重寿〕

一〇―一五

解放軍の人脈形成の諸条件（下）―中国未完の革命（一五）〔上別府親志〕

一六―二五

阪谷芳郎財政顧問の中国派遣問題と英米両国の反応〔河村一夫〕

二六―三四

あの頃の上海（五）〔長山義男〕

三五―四〇

第一一三六号 一九七六年七月号

巻頭言 アメリカ建国祭と新米外交〔三好貞雄〕

二―二

第三次国連海洋法会議第四会期（ニューヨーク春会期）

―新しい海洋秩序の形成過程〔井口武夫〕

三一―一五

ソ連邦党要人の軍内進出と軍事政策〔完倉寿郎〕

一六―三〇

発展途上国と発展のレベル（上）〔国連事務局（浦野起央訳）〕

三一―四五

第一一三七号 一九七六年八月号

巻頭言 東亜の現状をくすすな〔三好貞雄〕

二一二

第四回UNCTADを顧みて〔堀村隆彦〕

三七八

第四回UNCTAD木村俊夫日本政府首席代表演説（一九七六年五月一日ナイロビ）

九一―一五

その後のポルトガル植民地問題〔青木出郎〕

一六―二四

発展途上国と発展のレベル（下）〔国連事務局（浦野起央訳）〕

二五―四一

第一一三八号 一九七六年九月号

巻頭言 建国二百年を迎えたアメリカの国家目的〔田村幸策〕

二一六

国際共産主義運動の歴史とその中における全欧共産党会議の位置づけ〔真弓隆〕

七―二〇

ソ連のいわゆる「無階級社会の招来」とか「民族解放」というイデオロギーの

二一―二八

まやかしについて〔落合忠士〕

二九―三七

鄧小平失脚にみる中国の新動向〔上別府親志〕

二九―三七

満州事変直前の張学良の一面

三八―四二

―昭和六年春の宋元明清美術展への名画出陳に関連して〔河村一夫〕

三八―四二

第一一三九号 一九七六年一〇・一一月合併号

巻頭言 ブレジネフ書記長に与う〔三好貞雄〕

二一四

特集 アンケート 毛主席死亡後の中国

〔青木出郎・安倍源基・中華週報・遠藤晴久・江尻進・藤井彰治・藤田信勝・藤田宏郎・

長谷川光太郎・日比野正明・林三郎・原正行・服部秀一・石川忠雄・伊手健一・池田善昭・

石村暢五郎・岩村博文・伊藤皓文・磯崎健之助・岩島久夫・小島憲・北岡勲・甲谷悦雄・

上条末夫・岸田純之助・亀山一二・清野健・久保田徳夫・金晋根・絹川二郎・木村明生・

金山政英・近藤三千男・北島平一郎・近藤真男・上別府親志・加藤隆・三瀧信吾・

森田大耕・松本明重・牧内正男・宮崎繁樹・真鍋一・森松俊夫・宮脇岑生・松下正寿・

宮下忠雄・増田弘・丸山繁郎・柘山堯司・森山昭郎・長山義男・中嶋嶺雄・中山治一・

野村実・岡本順一・大原実・小幡操・越智元治・王子天徳・落合忠士・大沢正臣・

大島忠雄・佐々木春隆・坂田善三郎・清水良三・末松満・末次一郎・島谷正亮・関戸辰蔵・

瀬尾秀彰・瀬川善信・斎藤忠・田岡良一・田中勇・田中正明・津久井龍雄・渡嘉敷一郎・

竹中重寿・辰巳浅嗣・梅原一雄・渡辺昭夫・安岡正篤・山村文八・山中大吉・吉田奎文・

靈山徳行・小山内高行・山口開治・江頭数馬〕

五―四一
四二―四七

ポーツマス講和条約の元型はイェール大学で生まれた(一)〔松村正義〕

第一一四〇号 一九七六年二月号

巻頭言 華国鋒体制の本質と将来〔三好貞雄〕

二―三

レバノン内戦の終結と今後〔岩永博〕

四―八

最近の国際情勢とわが国の外交課題〔阿木八郎〕

九―一四

ポーツマス講和条約の元型はイェール大学で生まれた(二)〔松村正義〕

一五―二〇

中ソ対立とアジア情勢の流動性―回顧と展望〔島谷正亮〕
発展途上国と参加のレベル（上）〔浦野起央〕

一一―一二四
二五―三八